

可搬式椅子の設置を通じた場所愛着向上の試み

An Attempt to Foster Place Attachment through the Placement of Portable Chairs

山脇 聡太¹ 松村 真宏²

Sota Yamawaki¹ Naohiro Matsumura²

¹ 大阪大学経済学部

¹ School of Economics, Osaka University

² 大阪大学大学院経済学研究科

² Graduate School of Economics, Osaka University

Abstract: This study examines the effects of "Chairing" on the formation of place attachment, focusing on Nakayama Pond, an underutilized space on a university campus. An experiment involving 29 students and local residents was conducted to analyze changes in sketch maps drawn before and after their stay, as well as unstructured interviews regarding their experiences. A cross-analysis of the types of experiences and the transformations in the sketch maps revealed the following findings. First, "environment-enjoying behaviors," where participants directed their visual and auditory attention toward nature, induced an enlargement of Nakayama Pond on the campus maps compared to pre-experiment drawings, showing a strong association with the formation of emotional place attachment. Second, "socializing behaviors," such as conversing with companions, promoted the detailing of the surrounding environment rather than the enlargement of the pond itself, suggesting a contribution to attachment formation through deepened spatial cognition. These results suggest that the placement of portable chairs is an effective intervention for fostering the initial formation of place attachment.

1. はじめに

1.1 大学キャンパスにおける場所愛着

我が国の大学において、魅力的なキャンパス環境の整備は喫緊の課題である。日本学術会議の提言[1]では、魅力あるキャンパスを「学生や教職員、地域の人々に愛され、誇りとなり得る空間」と定義し、空間の魅力そのものが学生の学習・研究意欲を喚起する動機付けになると指摘している。

また、大阪大学キャンパスマスタープラン[2]においても、学生が主体的に関わる環境形成プロセスこそが、大学に対する誇りや愛着を醸成し、学内コミュニティの活性化に寄与すると明記されている。このように、学生が愛着を感じられる空間を創出することは、現代の大学計画において不可欠な要素である。

1.2 中山池の現状と課題

本研究の対象地である大阪大学構内の中山池周辺は、豊かな水辺と緑地を有する自然環境である。

Kaplan & Kaplan[3]の注意回復理論によれば、こうした自然環境は精神的な疲労を回復させ、ストレスを軽減させる環境として高いポテンシャルを有しており、本来であれば、多くの学生が休憩や昼食時に訪れ、リラックスできる空間として親しまれうる場所である。

しかし、現状の中山池周辺は学生の主要な活動動線から外れており、滞在を促すベンチなどの設備も不足している。そのため、豊かな環境資源がありながらも、多くの学生にとっては単に目の端を通過する空間として認識されているのが実態である。本来得られるはずの心理的恩恵が享受されておらず、学生と場所との関係性が希薄なまま放置されている点は、キャンパス環境の質的向上における課題といえる。

1.3 関連研究

Altman & Low[4]は場所愛着を「人と場所との間に形成される情緒的な絆」と定義し、物理的環境との結びつきが個人の心理的安定やアイデンティティ形成に寄与することを示した。また、中村・松田[5]は、

大学への愛着が高いほど、大学生活に対する主観的な不適応感（大学生活が辛いと感じる感覚）が低減されることを実証している。彼らの研究によれば、大学への愛着は友人関係の良さなどを媒介して不適応感を抑制し、結果として出席率やGPAといった指標にも影響を及ぼすと指摘している。

これらの愛着形成の構造について、Scannell & Gifford[6]は「人・過程・場所」の三側面からなる枠組みとして整理した。また、Lewicka[7]は、場所に対する直接的な探索や活動といった「体験」こそが愛着形成に重要であることを指摘している。

従来、場所愛着を高める要因としては、Kasarda & Janowitz[8]が示した居住年数や地域活動への参加頻度といった、長期的かつ累積的な関与が主として議論されてきた。

しかし、大学生活の多くは4年間という限られた期間で完結するため、中山池のような未利用空間との関係性を変容させる上では、長期間の自然な定着を待つのではなく、短時間であっても愛着を形成する介入をする必要がある。

そこで本研究では、公共空間に可動式の椅子を配置する「チェアリング」を介入手法として取り上げ、学生の自発的な滞在行動を誘発し、場所愛着の形成がいかにされるかを検証する。

2. 既往研究とアプローチ

2.1 場所愛着に関する研究と定義

場所における具体的な体験内容と愛着の関係について、石原・太幡[9]は大学生を対象とした調査を行い、以下の傾向を明らかにした。彼らは、愛着のある場所と、そこでの経験を非構造化インタビューにより聴取し、同時にその場所のスケッチマップを描かせることで、愛着のある場所の描かれ方を分析した。その結果、以下の傾向が明らかにされている。

第一に、行動と愛着強度の関係である。同研究によれば、「自然と関わる」行動は、環境との直接的な相互作用を伴うため、場所に対する「強い愛着」と結びつきやすい。一方で、「会話する」行動は環境との結びつきが相対的に弱く、形成される愛着も弱くなる傾向が示されている。

第二に、スケッチマップに表れる特徴である。強い愛着を持つ場所のスケッチマップは、描画範囲が広域に及ぶ傾向がある。また、場所の地形や自然要素などが詳細に描かれる特徴も確認されている。

このような、対象をスケッチとして描かせることで主観的な空間の捉え方を分析する手法は、Lynch[10]による都市のイメージに関する研究に端

を発するものである。Lynchは、人々が環境に対して抱くイメージの明瞭性が、その場所における個人の心理的な安定や場所のアイデンティティ形成に寄与することを指摘した。本研究におけるスケッチマップの援用も、利用者が物理的環境をどのように内面化し、それが場所愛着とどのように結びついているかを考察する上での重要な指標として位置づけられる。

2.2 場所愛着に対する仕掛学的方法

場所愛着の形成には、その場所における「体験」が不可欠である。そこで本研究では、「仕掛学」の概念を活用し、場所愛着の向上を試みた。仕掛学とは、「仕掛け」を通じて人々の行動を強制することなく自然に変容させ、社会問題の解決を目指す学問である[10,11]。本研究では、可動式の椅子を配置する「チェアリング」を仕掛けとして用いる。この仕掛けにより自発的な滞在が生じた場合、それが石原らが示した「自然と関わる行動」などの環境への関与につながり、場所愛着の初期形成に寄与すると考えられる。

3. 実験計画

3.1 実験概要

本研究では、チェアリングによる滞在が愛着形成に与える影響を検証するため、中山池にて表1の日程で実験を実施した。被験者は、大阪大学に在籍する学生や、大阪大学近隣に住む住人29名であり、中山池への来訪頻度や事前の関心度は様々である。

日付	時間
11月1日(土)	12:00~18:00
11月2日(日)	12:00~17:00
11月19日(水)	12:00~15:00
11月20日(木)	12:00~15:00
11月26日(水)	12:00~15:00
11月28日(金)	12:00~15:00
12月2日(火)	10:00~15:00

表1：実験日程

3.2 実験手順

実験は以下の手順で行った。

- 1 スケッチマップの描画:A4サイズの白紙を渡し、大阪大学の地図を描いてもらった。描画範囲や



図1： 実験の様子（豊中キャンパス）



図2： 実験の様子（豊中キャンパス）

詳細度は被験者に委ねた。

- 2 チェアリングの実践：被験者に可動式の椅子を手渡し、中山池周辺の好きな場所を選んで設置してもらおう。その後、任意の時間、その場所で自由に過ごしてもらおう。
- 3 非構造化インタビュー：滞在直後に、石原・太幡 [9] の手法を参考に非構造化インタビューを実施した。主な質問項目は「そこで何をしていたか」「どのようなことを感じたか」などであり、被験者の自発的な語りを重視した。
- 4 スケッチマップの描画：インタビュー後、再度A4サイズの白紙を渡し、同様の指示を与え、大阪大学の地図を描いてもらった。

3.3 分析手法

得られたデータは、I インタビューデータの分析と、II スケッチマップの分析を実施した。

I インタビューデータの分析

インタビューデータから、被験者が滞在中にどのような行動をとっていたか、また何に注意を向けていたかに関する記述を抽出した。得られた記述内容の類似性に基づきグルーピングを行い、滞在体験の類型化を行った。

II スケッチマップの分析

実験前後に描いたスケッチマップを比較し、描画内容にどのような変容が見られるかを分析した。特に、中山池の描画サイズ、周辺環境の記述の有無、位置関係の正確性などの観点から特徴的な変化パターンを抽出し、類型化を行った。

3.4 仮説

本研究では、石原・太幡 [9] が示した「自然と関わる行動は強い愛着を生み、それはマップ上の『広域・詳細』な描画として表れる」という知見を基盤とする。この理論に基づき、本実験の結果について以下の仮説を設定する。

仮説 I：チェアリングの実践は、被験者に対して環境への没入を誘発する

仮説 II：被験者のスケッチマップには、強い愛着の形成を示す「描画範囲の拡大」や「環境記述の詳細化」といった、愛着向上を示す変容が表れる

4. 実験結果

4.1. インタビュー内容の分析

非構造化インタビューの分析にあたり、被験者の語りに含まれる要素を抽出した結果、体験は以下の4つに類型化された。なお、1名の被験者が複数の要素を持つ（例：会話しながら環境も楽しむ）場合はそれぞれに重複して計上している。

I 環境を楽しむ人（計19名）

視覚・聴覚・触覚を自然環境へ向けた語りが見られた群である。最も多かったのは、特定の作業を行わず、環境そのものを享受した被験者（1, 2, 7, 8, 11, 13, 14, 15, 16, 18, 20, 22, 26, 29）である。これに加え、他の活動を行いながら環境を楽しんだ被験者も含まれる。例えば、会話中心であった被験者4, 5, 6, 10



図3： スケッチマップの例（被験者26、事前）



図4： スケッチマップの例（被験者26、事後）

は、会話の中で「カメがいる」「鳥の声がする」など環境要素に積極的に言及しており、交流と同時に環境鑑賞を行っていた。また、写真撮影を行った被験者24も、被写体を探さず中で環境の美しさに触れる様子が見られた。

II 同行者と交流する人（計9名）

同行者との会話を行った群である。被験者3、4、9、10は家族と、被験者5、6、8、27、28は友人と訪れた。このうち、被験者4、5、6、10は前述の通り環境への言及も見られたが、被験者3、8、9、27、28の会話は環境とは無関係な話題が主であった。しかし、被験者27が「人を気にせず話せた」と述べるなど、環境の開放性が交流を促進する効果も見られた。

III 能動的に楽しむ人（計5名）

明確な目的を持って空間を利用した群（5名）も確認された。被験者19は読書を行い、被験者17、21、23、24は写真撮影を行った。この類型において、中山池は活動の場所として機能しており、被験者の語りは「集中しやすさ」や「写真映え」といった機能的側面に言及する傾向が見られた。

IV あまり楽しめなかった人（計2名）

環境や滞在に対してネガティブな反応、または没入できない様子が主だった群である。被験者12は電波状況の悪さを訴え、被験者25は人目を気にして落ち着かないと記述している。これらは環境に対して肯定的・受容的な関心を持たなかった事例である。

4.2. スケッチマップの分析

事前（図3）および事後（図4）のスケッチマップを比較分析し、見られた変化を以下の4つに類型化した。なお、1名の被験者に複数の変化が確認された場合は、各類型に重複して計上している。

I 対象拡大（計10名）

事後マップにおいて、中山池の描画サイズが拡大した群である。被験者2、4、6、7、10、15、18、20、22、24に見られた。環境に没入していた被験者20や、会話しながら環境を見ていた被験者4、6などが含まれる。特に被験者24や10のマップでは、事前には紙面の端に小さく描かれていた池が、事後には紙面の大半を占めるサイズで描画された。また、池以外の要素（校舎など）の描画が省略・簡略化される事例も確認された。

II 池周辺地図の再構築（計14名）

池そのものの拡大よりも、周辺施設（建物、道、広場）との位置関係、距離、方向の記述が修正・詳細化された変化である。被験者5、8、9、11、14、16、19、23、27、28に加え、対象拡大も見られた被験者7、10、15、24も、同時に周辺情報の詳細化に該当する。被験者15や23の事後マップでは、池の位置を起点として、周辺にある「かさね」や校舎の配置関係が修正されており、要素間のつながりがより正確に表現された。

III 新規出現（計5名）

事前マップにはなく、事後マップで初めて中山池が描かれた群である。被験者1、3、13、16、26が該

当する。これは、実験前には地図上で表現されなかった空間が、滞在経験を経て認識対象として地図上に現れたことを示している。

IV 現状維持（計5名）

事前・事後で記述量や構成に顕著な変化が見られなかった群である。被験者 17、21、29 に加え、滞在を楽しめなかった被験者 12、25 がここに該当した。ネガティブな体験や、そもそも大学への愛着が成熟し切っている場合、短時間の滞在では認知地図の書き換えが発生しにくいことが示された。

4.3. クロス分析

	対象 拡大	再構築	新規 出現	現状 維持
環境を 楽しむ人	10	9	4	1
交流 する人	3	6	1	0
能動的に 楽しむ人	1	3	0	2
楽しめ なかった人	0	0	0	2

表 2：クロス集計表

体験類型とマップ変化類型の関係について、被験者ごとの重複を考慮したクロス集計を行った結果、以下の3つの対応関係が見出された。

I 環境への没入と対象拡大の連動

「環境を楽しむ人」に分類された 19 名の半数以上にあたる 10 名が、マップ上で「対象拡大」の変化を示した。被験者 20 は自然音に聞き入り、被験者 10 は視覚的に対象を捉え続けた結果、事後マップにおいて池を現実の縮尺以上に大きく描いた。特定の活動を行わずに環境へ感覚を向ける行為は、対象への心理的な重み付けを高め、地図表現上の拡大に直結する傾向がある。

II 交流・活動による周辺環境記述の詳細化

「同行者と交流する人」や「能動的に楽しむ人」においては、「対象拡大」よりも「池周辺環境の記述詳細化」の変化が多く見られた。「同行者と交流する人」9名のうち6名、「能動的に楽しむ人」5名のう

ち3名が記述の詳細化を示している。例えば、会話を中心とした被験者 27、28 や、読書を行った被験者 19、23 は、事後マップにおいて池単体の拡大ではなく、周辺の建物や道の配置関係を修正・詳細化させていた。なお、「同行者と交流する人」のうち「対象拡大」を示した3名（被験者 4、6、10）は、全員が「環境を楽しむ人」との重複該当者であった。会話のみを行い環境に言及しなかった被験者群では対象拡大は見られず、周辺構造の記述が増加する傾向にあった。

III 不快要因と現状維持

「楽しめなかった人」に分類された被験者 12、25 は、いずれも「現状維持」の結果となった。物理的にその場に滞在していても、不快要因（電波、人目など）により注意が環境の肯定的側面に向かない場合、新たな空間認知の形成や地図の書き換えは発生しにくいことが確認された。

5. 考察

5.1 主結果

本実験におけるインタビューおよびスケッチマップのクロス分析から、中山池における滞在体験と空間認識の変容には、三点の主要な結論が導かれた。

第一に、視覚・聴覚・触覚を環境へ向けた環境を楽しむ行動は、場所への情緒的な愛着を示す対象拡大を誘発した。

第二に、同行者との会話や読書などの活動利用は、環境への没入を伴わない場合、拡大よりも周辺環境の記述詳細化を促進した。

第三に、不快要因の存在はキャンパスマップの変化を阻害し、現状維持となった。

5.2 考察

石原・太幡 [9] は、大学生の過去の記憶に基づく愛着形成の研究において、「自然と関わる」行動は環境と直接的に触れ合うため強い愛着を生みやすいと指摘している。本実験における「環境を楽しむ人」の行動は、この「自然と関わる」行動と合致し、短時間の滞在であっても環境との情緒的な結びつきが形成され、それがスケッチマップ上での拡大として表現されたと考えられる。

一方で、「同行者と交流する」行動をとった被験者については、石原・太幡のモデルにおける「弱い愛着」の傾向（対象拡大が見られない）と整合したが、

本実験では新たにマップの「周辺環境記述の詳細化」が顕著に見られた。この背景として、実験対象地である中山池が、学生にとって既知の空間であったことが影響していると考えられる。未知の場所を新たに学習するのではなく、交流を通じて過去の記憶や知識が喚起されたことで、場所への理解が促進され、結果として周辺環境の記述が詳細化されたと解釈できる。

また、「楽しめなかった人」が現状維持となったのは、単に中山池に身を置くだけでは地図は更新されず、そこに主体的な体験が伴って初めて、場所は人の記憶の中に意味のある空間として定着すると言える。

6. 結論と今後の課題

6.1 総括

本研究では、大阪大学中山池を対象に、チェアリングを用いた短期的な滞在実験を行い、愛着の関係を検証した。その結果、チェアリングは自発的に「自然と関わる行動」を誘発し、場所への愛着を形成する有効な仕掛けであることが確認された。また、同行者との交流や活動は、中山池周辺の記述詳細化を促進し、場所の滞在可能性の認知に寄与することが明らかになった。

6.2 今後の課題

本研究の限界として、以下の3点が挙げられる。

第一に、内的妥当性に関する課題である。被験者数が29名と少なく、個人の描画能力や元々の場所への愛着のばらつきが結果に影響を与えている可能性を排除しきれない。

第二に、外的妥当性の課題である。対象地である中山池は大学キャンパス内にある自然環境であり、被験者である大学生にとってはある程度の日常圏域に含まれている。都市的な広場や、全く未知の自然環境において同様の傾向が見られるかは定かではない。

第三に、測定手法の時間的制約である。本実験におけるスケッチマップ法は一回性の滞在直後に実施されたものである。石原・太幡 [9] の研究は過去の記憶を対象としているのに対し、本実験の結果には直近の体験による短期記憶の鮮明さが影響している可能性がある。この変化が長期的な場所への愛着として定着するか否かについては、継続的な調査が必要である。

参考文献

- [1] 日本学術会議 土木工学・建築学委員会：我が国の大学等キャンパスデザインとその改善に向けて(2017)
- [2] 大阪大学：大阪大学キャンパスマスタープラン 2005, (2005)
- [3] Kaplan, R., and Kaplan, S.: The experience of nature: A psychological perspective, Cambridge University Press, (1989)
- [4] Low, S. M., and Altman, I.: Place attachment, In Place attachment, pp. 1-12, (1992)
- [5] 中村真, 松田英子: 大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響 (2): 出席率, GPA を用いた分析, 江戸川大学紀要, No. 25, pp. 135-144, (2015)
- [6] Scannell, L., and Gifford, R.: Defining place attachment: A tripartite organizing framework, Journal of Environmental Psychology, Vol. 30, No. 1, pp. 1-10, (2010)
- [7] Lewicka, M.: Place attachment: How far have we come in the last 40 years?, Journal of Environmental Psychology, Vol. 31, No. 3, pp. 207-230, (2011)
- [8] Kasarda, J. D., and Janowitz, M.: Community attachment in mass society, American Sociological Review, Vol. 39, pp. 328-339, (1974)
- [9] 石原可南子, 太幡英亮: 大学生を対象とした経験的側面から見る場所への愛着の形成パターンに関する研究, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 85, No. 777, pp. 2297-2305, (2020)
- [10] Lynch, K. (丹下健三, 富田玲子訳): 都市のイメージ, 岩波書店, (1968)
- [11] 松村 真宏: 仕掛学, 東洋経済新報社. (2016)
- [12] 松村 真宏: 実践仕掛学, 東洋経済新報社. (2023)

Appendix

Appendix A. 被験者データ一覧

本章では、本研究の協力者29名の属性およびインタビュー記録の概要を記述する。各項目の冒頭に協力者IDと基本属性を示し、続けて発言内容の要約を記載した。

ID-01 (男性/20代) 大学構内はよく散歩するが、全く知らない場所があるとは知らず、新しい発見があって楽しかったと述べた。チェアリングについては「色んなところで座れたので、景色を楽しめた」と評価し、特にお気に入りのエリアとして草木で覆い隠される場所を挙げた。一方で、地面のぬかるみについて指摘があった。次回は本などを持参し、ゆ

ゆっくり時間を楽しみたいとの意向を示した。

ID-02 (男性/40代) 一人で静かに過ごすために来訪した。目から入る自然が美しく、頭がスッキリしたと述べた。当初は手持ち無沙汰になると予想していたが、案外楽しむことができたという。草が邪魔で奥まで入れなかった点を残念がったが、未知の景色を見られたことを高く評価した。また、どんぐりを集めて池に投げ込むなどの行動も見られた。

ID-03 (女性/20代) 普段は吹田キャンパスに通っており中山池の記憶は薄かったが、近づいてみると自然が綺麗で楽しかったと語った。母親と会話をして過ごし、「寒くならなければずっといたかった」と高い満足度を示した。椅子については「常設してほしい」「吹田にも置いてほしい」との要望を挙げた。

ID-04 (女性/50代) 歩き疲れていたため、座って休憩できたことで気分がスッキリしたと述べた。連れと静かな空間でゆっくり話をしながら、想像以上に多くの生き物(特に亀)がいたことを楽しんだ様子であった。居心地の良さを高く評価した。

ID-05 (男性/50代) 友人と二人で会話をして過ごしたが、話の合間に「鳥の音がする」と環境音に言及するなど、周囲の自然も楽しんでいた。一人で散歩するのに、複数人で時間を潰すのにも適した場所だと評価した。草が生い茂っていたためくしゃみが出たとのことだが、夜に来て酒を飲んだり、趣味のラジコンを走らせたりしたいとの意向を示した。

ID-06 (女性/50代) 日常的に近くを通るが、改めて座って景色を見ることで「池がこんなに綺麗だとは思わなかった」と新しい視点を得た様子であった。時間を忘れて話すだけの時間の中で、ふと目に入る風景が非常に落ち着くと評価した。「次はここで寝たい」との感想を述べた。

ID-07 (男性/20代) 滞在中は貯水タンクを眺め、「森の中にいるみたいですごくゆったりできた」と感想を述べた。風が強く読書には不向きだったが、何もしない時間を肯定的に捉えていた。椅子の座り心地を評価し、個人的に欲しいともコメントした。「絶対に無理だと思うが喫煙可ならとても嬉しい」との発言も見られた。

ID-08 (女性/60代) 近所に住んでおり、今回は友人と共に訪れた。普段は散歩やラジオ体操で来ることがあるという。池のほとりに椅子を置き、会話を

楽しみながら石畳から池を眺めて過ごした。「ここを散歩できたら楽しいのに」と思いながら歩いていたという。次回はお弁当を持参したいと語った。

ID-09 (女性/20代) 普段は登下校で通過するのみであったが、「何もしない時間が逆に新鮮だった」と語った。視点を変えて「かさね(レストラン)」を見たことで、綺麗な建物であると再認識したという。吹奏楽部の演奏を聴きながら曲名当てをするなど、聴覚情報も楽しんでいた。

ID-10 (女性/50代) 阪大には何度か来たことがあり詳しいが、今回は娘との会話と景色を眺める時間の両方を楽しんだ。話しながらもアオサギや亀などの動物を観察できたことを高く評価した。水際での滞在に少し恐怖を感じつつも、心がスッキリし、落ち着いたと述べた。次はボートを浮かべてゆっくりしたいとの意向を示した。

ID-11 (男性/20代) 景色を見ながら過ごした。普段ボーッとすることがないため面白く、非日常的な感覚を得たという。あまりに没頭しすぎて何も考えていなかったと述べ、次回も同様に過ごしたいとの意向を示した。

ID-12 (男性/20代) 普段から豊中にいるが、ポスターを見るまで池の名前も知らなかった。ボーッとする時間を「暇だった」と表現し、携帯の電波が悪かったこともあり、空や水面を眺めていた。暇つぶしの道具があれば面白かったかもしれないと述べた。

ID-13 (男性/50代) 足が疲れていたため、座って休憩できたことを肯定的に評価した。「ボーッとすることに集中していた」と述べ、初めての経験(チェアリング)を面白いと感じた様子であった。椅子の数が増えれば利用促進につながるなどの意見を提示した。

ID-14 (女性/50代) キラキラ輝く水面を見ることで落ち着いた気分になり、「瞑想しているみたい」「ハマりそう」と高く評価した。池越しに見える広場にも関心を示し、自分用の椅子購入も検討するほどの好感触を得た。

ID-15 (男性/20代) 人目を気にせず日光浴を楽しんだ。トンボやネコなどの生態系が豊かで、大学内にこれほど自然を感じられる場所があるとは知らなかったと驚きを示した。釣りやボート、遊泳など、水辺のアクティビティへの関心を語った。

ID-16 (男性/20代) 音楽を聴くのをやめ、自然の音に耳を傾けることでリラックスし、キャンプのような気分を味わった。空腹のため早めに切り上げたが、次回は食事や本を持参するか、寝て過ごしたいと語った。

ID-17 (男性/20代/阪大生) 切り株に座り、トンボの写真を撮るなどして過ごした。池の雰囲気は良かったが、芝生の座り心地には不満を感じた様子であった。上着がなく寒かったため、「あと1時間はいたい」と思いつつも切り上げた。

ID-18 (男性/20代) 池には入らず、人の流れを眺めて過ごした。葉の音や鳥の声など、普段意識しない環境音に気づくことで「心にゆとりが生まれた」と語った。多忙な日常の中で、喫煙時以外に安らぐ時間が少ないと述べ、「整う感覚」が得られたことから、サウナのような利用可能性を示唆した。

ID-19 (男性/20代) 食事を摂りながら小説を読んでいた。適度な雑音が読書の助けになった一方、虫の多さに指摘もあった。「常にこの場所を開放してほしい」と要望し、次回も読書をしたいと語った。

ID-20 (女性/60代) 鴨や亀を眺めたり、葉を見たりして過ごした。魚はいなかったが鳥の声が心地よく、忙しい日常から離れた時間を持てたと評価した。

ID-21 (女性/50代) 大学に30年ほど関わっているが、今回は写真を撮るなどしてくつろいだ。風は冷たかったが心地よく、散歩のルートとして今後も利用したいと述べた。

ID-22 (男性/20代) スマホを見たり池を眺めたりして過ごした。静かで風が気持ちよく、良い気分転換になったと語った。普段は通り過ぎる場所だが、座ってみることで良さに気づいたという。「ホトリング」という名称を提案し、疲れた時に一人で来たいと述べた。

ID-23 (女性/20代) 講義に遅刻したため、暇つぶしとして訪れた。写真を撮ったり木に触れたりすることでリラックスできたことと述べた。フェンスがあり入りにくい点を除けば、自然の豊かさなどの体験は肯定的であった。

ID-24 (男性/20代) 授業の合間に一人で立ち寄り、スマホ操作の合間に風景を眺めた。被写体を探して

写真を撮る中で環境の美しさに触れ、短時間でもリフレッシュになったと語った。たまには立ち止まるのも悪くないと感じたという。

ID-25 (女性/20代) ゆったりと過ごしたい気分であったが、人目が気になったと述べた。なんとなく特別な経験を得たものの、リラックスするためには、よりプライバシーが確保された環境が必要だと示唆し、不快感を示した。

ID-26 (女性/20代) ボーッとしたりスマホを見たりして過ごした。外で座る体験が新鮮で、風や虫を肌で感じる「森林浴」のような時間を楽しんだ。浪人時代に公園でリラックスした記憶を想起し、次回は葉っぱを拾いたいと語った。

ID-27 (男性/20代) 連れとの会話を楽しんだ。人を気にせず話せる環境や、鳥や虫の音がBGMとなり、授業前の良いリラックスタイムになったと評価した。動物が多く話題に事欠かなかったという。喫煙への欲求も口にした。

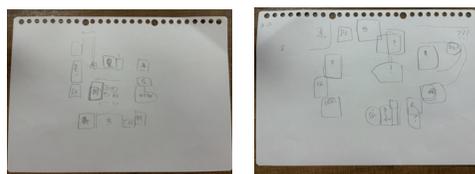
ID-28 (男性/20代) 連れと会話をしたり、石を投げたりして「子供の頃に戻った気分」を味わった。大きな声を出しても問題ない環境を評価し、紅葉の美しさにも満足した様子であった。喫煙や飲酒への意欲を示した。

ID-29 (女性/20代) 一人で水面のゆらぎを見ることで落ち着いた気分になったと語った。普段池を注視する機会がなかったため、良い経験になったという。環境面では、貯水タンクやそこにある落書きに関心を示した。次回も同様に「ボーッとしたい」との意向を述べた。

Appendix B. スケッチマップ一覧

本章では、分析対象とした被験者29名のスケッチマップ(事前・事後)を掲載する。各事例において、左側はチェアリング前、右側はチェアリング後に描画されたものである。

ID-01



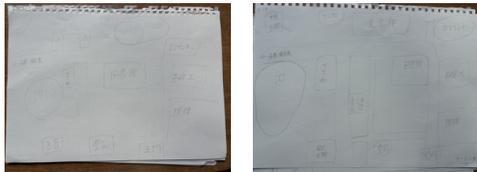
ID-02



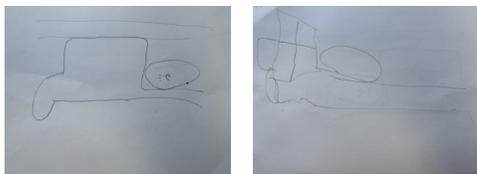
ID-04



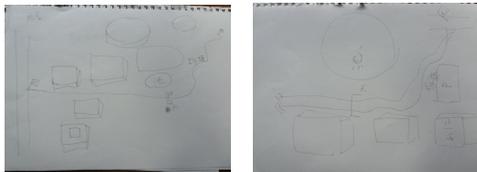
ID-05



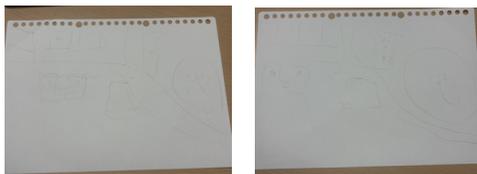
ID-06



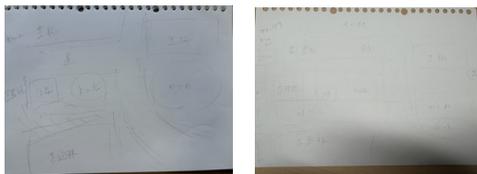
ID-07



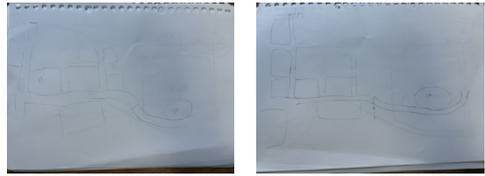
ID-08



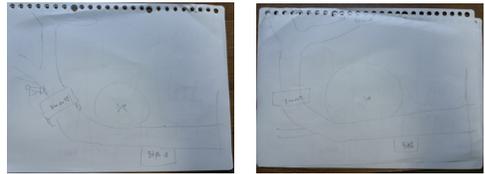
ID-09



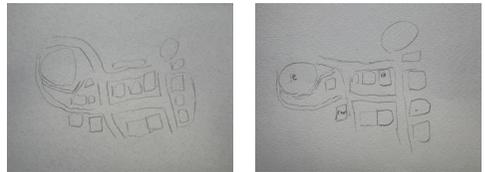
ID-10



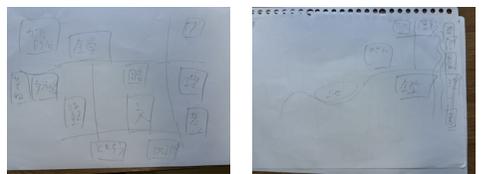
ID-11



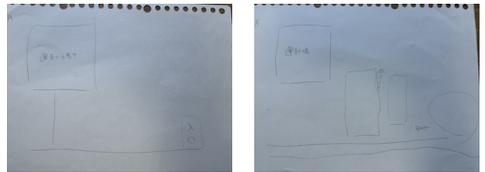
ID-12



ID-13



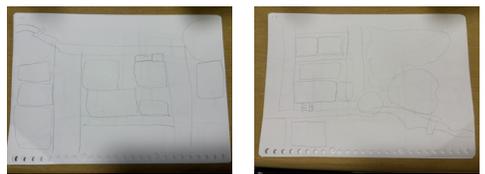
ID-14



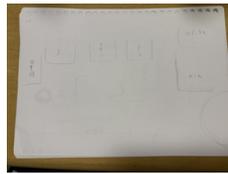
ID-15



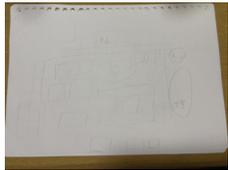
ID-16



ID-17



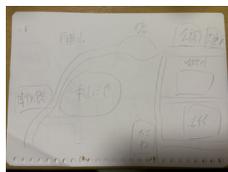
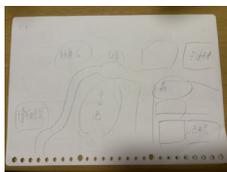
ID-18



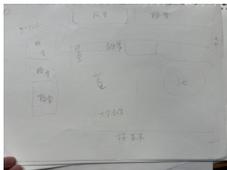
ID-19



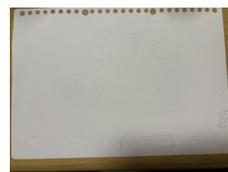
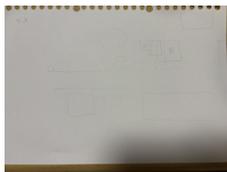
ID-20



ID-21



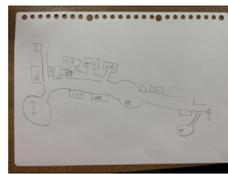
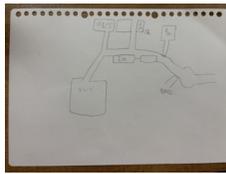
ID-22



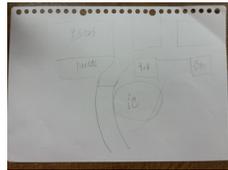
ID-22



ID-23



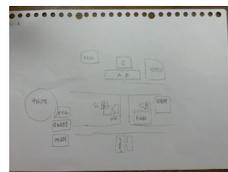
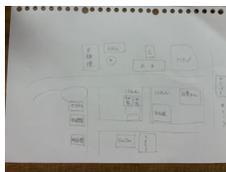
ID-24



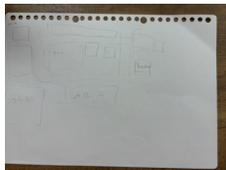
ID-25



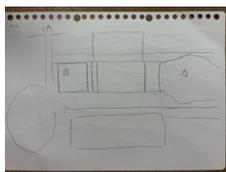
ID-26



ID-27



ID-28



ID-29

